



町民文芸

只見短歌会

二月詠草

大塚栄一

指導

病院の検査いくつも受くる朝長靴重く履きて出でゆく

古川 英子

寒明けて季節移ろふ頃なるに日毎降る雪我を悩ます

馬場 八智

降る雪を吸ひ込みて咳き咳く音の吸はれゆくらし行く道静か

小倉キミ子

豆拾ふ子らもなくなり節分に老らを呼びて息子豆撒く

渡部ゆき子

ふる里を離れ住む友電話などで年ごと故郷の思ひ深むか

関谷登美子

唐突に孫を託され嬉しけれどどの子と添ひ寝せむと迷ひつ

目黒 富子

雪まつり吹雪の中で舞ひたれば扇子持つ手に力入りぬ

渡部ヨリ子

同居する友活けくれし百合の花冬の佛間に時ながく咲く

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

三月例会

目黒十一

指導

法要の座敷に古き春火鉢
開幕は居合道見せ雪まつり

一穂

鴨一羽流れをくだる春の川
はだれ野や村の温泉にぎわえる

敦子

百段の磴露れり雪解風
玄関に乳の香流るる春日和

吉児

銀河消して峽を彩る冬火花
牡丹雪ささめき合つて道に消ゆ

さちを

ふるさとの春は名のみの吹雪かな
無人駅送る人なし名残り雪

信

厄払い下帯姿の男衆
大氷柱背伸びしている小学生

都

草を編む手の中光る弥生尽
鳥インフル見送りなしに鳥帰る

洋子

書き止めるなれど忘却おぼる月
朝霞林をぬけて春入日

味代子

それぞれの彩り秘めて冬木立
残雪を撥ねて椿のきらめけり

弘子

春泥を踏んで七戸へ布令にけり
聴講や声の遠のく春の昼

恒夫

掌に載るふくよかな陶雛
如月や軒垂る音光りつつ

礼

春満月われを小さくより小さく
こそばゆし春満月の内に居て

順子

峠越え見ゆる町並み雪間草
北風に向かう娘や入籍日

修一